

台湾人日本語学習者による指示詞の使用実態に関する研究 — 台湾で学習する学習者を対象に —	
孫 愛維	国際日本学専攻
期間	2006年9月6日～2006年9月30日
場所	台湾
施設	台湾中央図書館、国立台湾大学日本語学科、国立台湾大学言語研究センター

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

1.1 異なる学習環境における習得を研究する必要性

学習者が第二言語のインプットに接触しない限り、言語習得が不可能なのは明らかであり、インプットがいかなる役割を果たすかを探ることは第二言語習得における重要な課題である。迫田 (1998) は、インプットの内容、頻度がどのように言語習得に影響するのかを解明するためには、第二言語としての日本語学習者と外国語としての日本語学習者との比較をすることが有益だと指摘している。しかし、Freed (1995) にも示されるように、この異なる学習環境という視点は驚くほど重要視されていない現状が窺える。そこで本研究は、これらを第二言語環境・外国語環境という観点から分析・比較することによって、各々の習得プロセスを明らかにし、習得に影響を与える要因を突き止める。

1.2 指示詞に着目する理由

指示詞は空間、事柄を指し示す言語機能を持ち、日常生活で多用され、言語に普遍的に存在している基本的な用語である (Dixon2003)。しかし、空間、事柄などを指示する際、認知の仕方は民族によって多岐にわたり、一旦学習すればそれは根強く定着する。従って、習得初期に導入したにもかかわらず、話し手を中心とする二系 (這・那) 指示体系を持つ台湾人学習者は上級者になっても聞き手の立場も考慮される三分対立の日本語指示詞 (コ・ソ・ア) の誤用が目立つなど、指示詞は習得困難な文法項目だと言われている。しかし、中国語母語話者の日本語学習者の指示詞習得状況はまだ一部分しか明らかにされていないのが現状である。従って、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、より体系的に指示詞の習得全貌を解明する研究が必要であろう。また、海外でも活発に日本語教育が行われているものの、現在の日本語教育研究は主に日本国内を中心とされている。今後の日本語教育研究を進展さ

せるために、日本語教育者はそれぞれの環境における長所と短所を的確に把握し、学習者がバランスの取れた日本語能力が身につけられるような指導、支援を熟考する必要があるだろう。従って、日本国内のみならず、海外における日本語習得も視野に入れてそれぞれの結果を比較・検討することが肝要であると考え、台湾で日本語を勉強する学習者を調査することを計画する。学習者の習得データを収集するほかに、博士論文の執筆において、中国語指示詞に関する研究及び文献を踏まえる必要がある。そのほか、台湾で勉強している日本語学習者が使用する日本語の教科書についても把握する必要があると思われる。これらの文献資料及び教科書は、日本国内では入手が困難な場合もあり、台湾国内での調査が必要がある。そのため、今回の海外調査では、学習者の習得データを収集すると共に文献調査も合わせて実施する。

1.3 研究目的

以上の未解決な問題を踏まえ、本研究は、海外で日本語を学習する台湾人の指示詞使用実態及び中国語指示体系について明らかにすることを目的とする。

2. 海外調査概要

2.1 会話調査 (調査 1)

対象者：国立台湾大学の先生の紹介などを通して、当該大学日本語学科に在籍する大学生に協力してもらった。SPOT の点数によって中級者 20 名、上級者 20 名で、合計 40 名の会話データを収集することができた。

調査前：日本語能力を測定するため、SPOT (DE) (日本語能力簡易試験) を実施する。

本調査：話題によって指示詞の使用頻度に偏りが現れる可能性を回避するため、自由会話ではなく、統一テーマ (思い出のある先生について) を設定した。

また、初対面の緊張感を緩和するため、簡単な雑談の後、被験者に1時間のインタビューを行った。インタビューした直後、実際に指示詞の学習、使用時に感じたことについてフォローアップインタビューを行い、指示詞の学習方略及び使用時における学習者の意識を質的に分析した。

2.2 文献調査 (調査2)

台湾国内における指示詞に関する研究動向及び日本語の教材を調査することを目的として、国立台湾大学の図書館及び台湾国立中央図書館、国立台湾大学言語研究センターで、雑誌、大学紀要、学会誌、日本語教材、書籍及び修士・博士論文の調査を行った。

3. 調査の結果

3.1 調査1の結果

3.1.1 本稿の枠組み

本研究は、「研究者が多肢選択問題を作成する際の基準にするのに適している」と評価された宋 (1999) の指示詞の分析枠組みを援用し、対象者の会話データを分析する。本研究における分析枠組みを【表1】に示す。なお、記述の便宜性のために、それぞれの指示用法とそれに使われる指示詞を統合し、「独コ」、「独ア」、「相ソ」、「相ア」、「単コ」、「単ソ」と称することにする。

3.1.2 パイロット分析の結果

今回台湾で収集した40名のデータについて、パイロット分析の結果、日本語能力を問わず、台湾人の学習者は「コ」系が多用されることが分かった。下記のデータ例はその一例である。

データ

例1

S: 先生はよく JFL1 の悩みとか聞いてくれましたか。

JFL1: これは余りなかったです。

例2

S: 進学以外の問題について、先生と話したことがありますか。

JFL2: これは私の方にはないですが、ほかのクラスメイトはありました。

(S: 筆者、JFL1 と 2 は対象者を表す)

上記対象者が使用する指示詞については日本語母語話者から見れば、かなり違和感を覚えるのではないかと予想されるが、今回のデータの中では、しばしば観察される。会話相手が提出したものを指示する際、相対的話題指示の「ソ」を使用すべきなのに、台湾で学習している日本語学習者は上級者になっても、「コ」系指示詞を使っているため、誤用となっている。

また、「ア」系については、ほとんど誤用となっていることが挙げられる。例えば、以下はその一例である。

データ

例3

JFL3: あの先生は授業の後、子供に絵を描くことを教えました。

例4

JFL4: 結局渡された写真はあの先生学部時代の写真ですよ。

(JFL1 と 2 は対象者を表す)

台湾人日本語学習者の場合はよく聞き手が知らない指示対象についても、日本語例3、4のように「ア」系指示詞を使用し、誤用となっている。

更に、インタビューした直後、実際に指示詞の学習、使用時に感じたことについてフォローアップインタビューを行った結果、中級者は指示詞の役割についてあまり意識していないと回答した人が多かったのに対して、上級者は指示詞を間違っていると会話の支障にきた可能性を認め、指示詞の役割が重要だと答えた人が殆どである。

以上のパイロット調査から、台湾人学習者の指示詞習得研究から多くの示唆が得られるであろう。今後今回収集したデータ更に綿密に分析するために、量的、質的分析を行う予定である。そして、更に、台湾で学習している学習者と日本で勉強している学習者を比較し、両者の異同を分析する予定である。

3.2 文献調査 (調査2) の結果

今まで指示詞に対する関心が極めて低いとされる中国圏(木村1992)でも、最近の談話分析の一環として、指示詞を取り上げた論文が増加している。しかも、そのうちに遠近(高1986、中1990)、縄張り、視点(讀井1988、木村1992、陳露2004)など様々な角度から日中対照研究に携わる学者が少なくなく、大きな成果を収め、大幅な進展が見られる。以下は古くから説かれてきた「遠近」概念に基づく日中対照研究と「縄張り、視点」という概念を取り入れた日中対照研究をそれぞれ紹介する。

3.2.1 「遠近」に基づく研究

中国語の指示詞は近称の「這」と遠称の「那」という二項対立で形成され、「這」と「那」の使い分けは、話し手と指示対象との物理的ならびに心理的距離であると主張した研究に高(1986)、中(1990)などがある。以上述べた三つの研究の調査方法としては両言語で書かれた小説の翻訳を比較することである。まず、高(1986)は、「コノ、ソノ、アノ」を中心とし、両言語の対応関係を調査し、得られた結果を以下のように帰

納された。

コ系→ほぼ「這」に翻訳される。ソ系→「那」に訳されるが、「這」に訳される場合もある。

ア系→ほぼ「那」に訳されるが、稀に「這」に訳される状況もある。

また、「這」と「那」の使い分けについて、「作者や話し手が時間的、空間的及び心理的に近い存在を示している場合」は「這」を用い、「時間的、空間的及び心理的に隔たりのある対象を示す場合」は「那」を使用すると主張する。

次に、中（1990）では、小説の中で日中の指示詞の果たす役割の相違性を検証するため、高（1986）のように日本語から中国語に翻訳された訳文を検討する研究手法を採用すると共に、中国語の方から見た日本語の訳文も検討範囲に入れ、両方から検証を行った。その中に、とりわけ遠称の「ア」が近称の「這」と対応する場合を抽出し分析を行った。その指摘は三点挙げられ、その中の二点を以下のように述べる。

① 内言或いは独り言の場合：指示現場において相手がいなく、話し手の頭の中で言葉を使って考えるので、中国語においては基本的に「心理的に近い」に当てはまり、「這」が多用されると観察される。しかし、内言でも過去を回想している場合などでは、時間的に遠いということになり、「那」が多用される。

②直前に言及している人や事を再度取り上げ強調する場合：中国語では、あたかも遠くから近くへと対象をアップで捉えていく様に、「這」で言い換えることが多い。

日本語の遠称にあたる「ア系」に対応する中国語の近称にあたる「這系」に注目した中（1990）の研究から、中国語ではあくまでも話し手中心で、「這、那」をどちらに使用するかその主導権は話し手に握られると結論付けられており、大変興味深い結果と思われる。

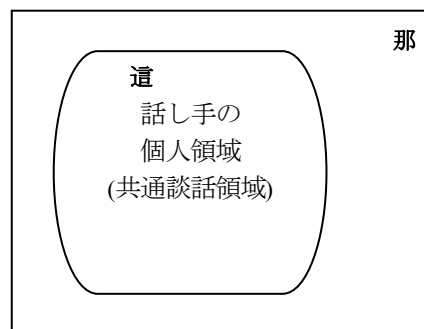
上記の論考をまとめてみると、基本的に日本語の「コ」は中国語の「這」に、「ソ、ア」は「那」に対応すると言われているものの、対照研究の成果から観察すると、そう短絡的に対応することには問題があると考えられる。中国語の遠称の「那」は日本語の「ソ、ア」に対応するが、近称の「這」は広く日本語の「コ、ソ、ア」に対応することがわかる。実際の中国語使用においては、「這」の汎用性が高いと示唆した。実際の言語使用資料を検索すると、「這」の使用率はすべての語彙の中で第十位に占められる一方、「那」の使用率は186位になり、両語彙の間には使用率においてかなりの差があることを明らかにした（徐 2001）。しかし、Huang（1999）では「中国語の指示詞は一部聞き手の

領域を認めている場合もあり、単純に中国語の指示詞が、話し手からの「距離型」に属するとは言い切れない」と述べている。「遠近」という概念でのみ中国語の指示詞体系を説明切れないことを指摘し、新たな研究方向が必要とされると示唆されている。

3.2.2 「なわばり」に基づく研究

外山（1994）では、正保の融合型、対立型の概念を取り入れ、「指示現場」の状況によって日中指示詞体系を精緻に比較した。指示現場の状況を明確に表すために、漫画を用い分析を試みた。その結果、日本語では話し手、聞き手のなわばり意識を基にそれぞれの指示詞を使い分けられているのに対し、中国語では、比較的話し手は聞き手の領域を意識することが稀にあり、自分から指示対象までの空間的、時間的、心理的遠近判断、及び親疎の感情などの基準によって指示詞を使い分けられていることが多数であるが明らかとなった。

讚井(1988)では、「現場指示用法(deictic usage)」と「文脈指示用法(anaphoric usage)」に分けて中国語指示詞の検討を行い、「中国語の通常の対話距離における対話では、話し手と聞き手は一般にたやすく共通の領域を形成する」と提示し、「共通談話領域」という概念を創出し、「近い」「遠い」という概念を兼ね、現場指示用法における中国語指示詞の原則を導き出した。つまり、【図1】に示されているように、「話し手の個人領域」もしくは「共通談話領域」にある場合「這」になり、それ以外の場合は「那」になる。



【図1】 讚井(1988)の「共通談話領域」説

木村（1992）は現場指示において、讚井が提出した「共通談話領域」という理論を踏まえ、「視点」理論まで発展させた。木村の調査によると、中国語の指示関係においては、聞き手の存在を考慮する割合が低く、話し手自身の考えで自分に近いか遠いかを判断する。言い換えれば、「あなた（聞き手）」の領域を「わたし（話し手）」に取り込み、「われわれ」という視点を利用し指示詞を使用する。木村（1992）はこの現象を「包含視点」と呼んだ。一方、話し手には自分と他人とい

う自他意識が働き、「あなた」と「わたし」という領域概念で指示詞を使用する場合は「対立視点」と称し、日本語、韓国語、英語はこの範囲に属する。調査資料によると、中国語では、会話相手から導入された内容でも、「われわれ」の領域として捉え、「這」を使用する。その結果から、中国語では「特定の指示詞によって聞き手の領域を独自に示すといった方策がない」と結論づけた。もし、その自他関係を明示したい場合は、人称代名詞によって反映する。張（1986：29）も同じ指摘を支持し、「中国語の指示詞の場合、それほど冷静で、客観的な表現はできず、むしろ今述べたばかりのことを目の前にあるように示すため、なお一層強調するように「這」を用いる」と指摘した。従って、中国語の場合は「這」系の使用が頻繁であるものに対し、聞き手の立場を考慮する日本語の場合は「ソ」系が多用される。陳露（2004）では、現場指示のみならず文脈指示も含め、木村の理論を援用し、中国語の指示詞使用状況を全面的に検討を行った。得られた結果に木村の話し手の視点と遠近という概念を兼ね、【表2】の如く整理した。

まず、指示場面に聞き手の有無によって、話し手の視点は一次的二次的に分けられる。次に、二次的の話し手視点において更に下位分類し、話し手が指示場面に存在する聞き手の領域を意識することがあるか否かによって、それぞれ「ワレワレの領域」と「ワレの領域対他者の領域」を捉える。一次的、二次的ワレワレの領域の場合では、話し手は指示対象を自分の感覚による物理的、心理的な遠近関係で指し示し、聞き手の立場を配慮する場合では、聞き手との一体化を強調し、「咱」という用語を利用する。もし、話し手が他者との関係を意識し始めると、「ワレの領域対他者の領域」になり、人称代名詞が指示詞と組み合わせさせた表現形式によって、その関係を明示することを可能にする。

上記の研究を概括すると、中国語の「這、那」の使い分けは話し手と指示対象との空間的、時間的、心理的距離であり、聞き手の存在を配慮するにも拘らず、指示詞選択に影響を与えることは殆どないと考えられる。しかし、これまで両言語の翻訳小説を調査資料として得られた結果と自然談話データから得られた結論には相違が見られる。Huang（1999）は中国人でも聞き手を配慮し相手の情報量を推測しながら、指示詞の使用を調整することを主張した。今後日中言語における指示詞の使用実態を解明するため、実際の談話資料に基づく日中対照研究が必要とされるといえるだろう。

3.3 日本語教科書の分析結果

本調査の対象者が使用する「大家的日本語」と「新

文化日本語」において指示詞コ・ソ・アがどのように扱われているかを調査し、分析した。その結果は以下のようにまとめた。

- ・ 現場指示について解説がなされているが、非現場指示に関しては「大家的日本語」では解説はなされていない。
- ・ 現場指示の導入と解説には、話し手と聞き手が対立意識を持つ「対立型」のみ提示している。
- ・ 現場指示に比較して、非現場指示の出現頻度が低い。

以上のことから指示詞の指導は軽視する傾向を浮き彫りにする。特に非現場指示については指導項目として取り上げられていないため、解説が与えられていない。そのため、学習者は指示詞について習得困難であることを推察される。

4. 博士論文における本海外調査研究の位置づけ

博士論文の主題は「異なる学習環境における指示詞の習得」である。異なる学習環境とは、日本で日本語を学習する第二言語習得環境（JSL）と海外で日本語を学習する外国語習得環境（JFL）を指す。果たして学習環境は指示詞習得においてどんな役割を果すかについて解明した上で、日本語教育への還元を目的とする。今回会話データは外国語習得（JFL）に関する会話調査である。文献調査は先行研究で述べる予定である。

参考文献

- 木村英樹（1992）「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて—」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』pp.181-211 ころしお出版
- 高麗雅（1986）「指示詞「コソア」についての考察」『日本語教育』60 pp.221-227
- 讚井唯允（1988）「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『人文学報』198 pp.1-19
- 迫田久美子（1998）『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コソアの習得』溪水社
- 徐黙凡（2001）「“這”、“那”研究述評」『漢語学習』5, pp.47-54
- 宋晚翼（1999）「韓国人学習者に対する非現場指示のソとアの指導」『日本語教育学の展開：奥田邦男先生退官記念論文集』pp.42-55 溪水社
- 陳露（2004）「中国語の指示語から—日本語との対照をかねて—」『国文学解釈と鑑賞』69 pp.188-198
- 張瓊玲（1986）「日中両国における指示詞の研究」『文献探求』17 pp.23-32
- 外山美佐（1994）「日・中両語における指示詞の比較について」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』9 pp.1-18

中みき子 (1990) 「小説における日・中指示詞の機能の差異について」『研究論叢』35 pp.278-287
 Dixon R.M.W. (2003) Demonstratives. A cross-linguistic typology. *Studies in Language*, 27-1, 61-112
 Freed. Barbara (ed) (1995) *Second language acquisition in a study*

abroad context
 Huang, Shuanfan (1999) The emergence of a grammatical category definite article in spoken Chinese. *Journal of Pragmatics*, 31, 77-94

そん あいひい／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻
 ivy68@hotmail.com

【表1】本研究における分析の枠組み

指示用法	指示対象	指示詞	例文
独立型の話 題指示	自分の観念の中に浮かべている話題性のある素材。	独コ	(自分の息子がまた犯罪を起こして、牢に閉じこめられたことを思い出して、一人でつぶやく) <u>こいつ</u> はどうしたのか。
		独ア	(昨日食べたフランス料理の味が忘れなくて) <u>あの</u> 料理は本当においしかったなあ。
相対型の話 題指示	自分か相手の表現内容にある、話題性のある経験素材。	相ソ	今朝李一星という人に会いましたが、 <u>その人</u> ご存知ですか。 いいえ、 <u>その人</u> 、知りません。
		相ア	昨日金君にあった。 <u>あの</u> 人は随分変わった人だね。 <u>あいつ</u> は変人ですよ。
単純照応指 示	自分の経験記憶が関わらない文脈の言語的なある素材。	単コ	<u>これは</u> 誰にも言わないでほしいのですが、私は実は猫が怖いです。
		単ソ	受付に誰かがいたら、 <u>その人</u> に渡してください。

【表2】中国語指示体系(陳 2004 : 197) (筆者の修正を加えた)

話し手の視点	指示対象との関係	
	近	遠
一次的	這+名詞(句)	那+名詞(句)
二次的 ワレワレの領域 (他者との一体化を意識する)	這+名詞(句)	那+名詞(句)
	咱+這+名詞(句)	咱+那+名詞(句)
二次的 ワレの領域対他者の領域 (他者との対立を意識する)	我+這+名詞(句)	我+那+名詞(句)
	你他+這+名詞(句)	你他+那+名詞(句)

【指導教員のコメント】

異なる言語はそれぞれ違ったやり方で空間や現実世界を切り分ける。とりわけ外国語の指示表現を学ぶことは、異文化における世界のとらえ方をかいまみる覗き窓ともいえよう。

二項対立型の指示詞を持つ中国語母語話者にとって、三項対立型の日本語の指示詞は習得上の難所の一つである。台湾における孫愛維氏の今回の調査は、学習環境要因が指示詞の習得にどのように影響するかを探るためのパイロット研究の役割を果たしている。

これまで環境要因の影響は主として英語学習者のデータをもとに論じられてきたが、英語と大きく種類の異なる日本語を視野に収めることにより、この分野の研究が新たな展開を見せる可能性を孕んでいる。そういった観点からも、今後の孫氏の研究の進展に期待が持たれる。

(人間文化研究科 教授 佐々貴 義式)